

米澤和彦教授への献辞

総合管理学部長 松 岡 泰

米澤和彦先生の経歴を、まずは簡単にご紹介します。米澤先生は1943年、熊本県北部の玉名のお生まれで、先生のお人柄の1つの特徴は、郷土にたいして強い愛着を持っておられることです。ふるさと「くまもと」に対する先生の地域貢献の原点は、ここにあると思われまます。先生は九州大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程を修了されると、熊本県の天草高校と多良木高校水上分校でそれぞれ3年間教壇に立たれました。しかしその後先生は研究生活に復帰され、九州大学文学部助手、現在の熊本学園大学（熊本商大）の教員を経て、1981年4月から県立大学の前身であります熊本女子大学生生活科学部に赴任されました。1994年に熊本女子大学が熊本県立大学に改組されたのにもない、先生は新設の総合管理学部に移られます。

ところで米澤先生のご専門は社会学で、ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーを研究対象に選ばれました。ご専門のマックス・ヴェーバーは、資本主義社会の経済的メカニズムを描いたカール・マルクス、精神分析の世界を切り開いたジグムント・フロイトと並ぶ「知の巨人」で、日本の社会科学全般に計り知れない影響を与えた思想家です。20世紀初頭のドイツは世界中の社会科学研究者が憧れる「知の拠点」でしたが、米澤先生は著書『ドイツ社会学史研究』（1991年）（博士論文）で、ヴェーバーを中心に、当時第一級の知識人たちの交流と社会学会設立の過程を生き生きと描き出されました。

先生は本学在職中、ボン大学（1984? 85年）とハイデルベルク大学（1986? 87年）と2度にわたってドイツ留学をされ、とりわけハイデルベルク大学では客員教授として授業を担当されました。また同留学中、ヴェーバー研究者の間でも「消失した」と考えられてきた幻の文献を、先生は執念の末にキール大学図書館で発見され、その文献を基礎に博士論文を書かれています。実に17年の

歳月を費やして、やっとこの文献に巡り会えた、と言うことです。さらに、1993年にミュンヘンで開催されました「マックス・ヴェーバー国際シンポジウム」に、先生は日本代表の1人として参加されておりますし、1994年には立て続けにウェーバー関係の共訳を3冊、すなわち W.モムゼン『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』、W.モムゼン『マックス・ヴェーバー』、W.シュルプター『現世支配の合理主義』を刊行されています。

前述しましたように、なるほど米澤先生は日本でも有数のヴェーバー研究者ですが、それでは学生のことは顧みない研究一筋の学者であったかという点、決してそうではありません。大学の研究者の中にあつて先生は人一倍「人として」の教育に情熱を注がれ、貴重な研究時間を割いて学生と酒を酌み交わし、泊まり込みの合宿にも付き合い、専門教育よりも人間教育に力を入れられました。現在30歳代から50歳代の教え子＝卒業生たちは、今でも異口同音に「すごい先生です」と語っていますが、実はそういう濃密な関係が背景にあるからです。また先生の講義は明快でわかりやすく、メリハリがあり、要するにその雄弁さで学生を魅了していましたので、授業評価アンケートをしますと、先生の評価は大学全体で常にトップクラスでした。先生はそういう意味で根っからの教育者です。

最後に、大学の指導者としての米澤先生に触れておきます。1994年4月に総合管理学部が発足し、手島孝教授が初代の総合管理学部長になりましたが、半年後の9月には手島学部長は学長に選出されましたので、米澤先生が手島先生の跡を継いで第2代の総合管理学部長に選ばれました。手島先生の学部長時代が数ヶ月と短かったので、米澤先生が実質的には初代の学部長といってよく、総合管理学部の基礎固めにご尽力されました。

その際忘れてならないのは、熊本女子大学の生活科学部から総合管理学部に所属を変えられた6人の移行教員の先生方の貢献です。この6人の先生方は年齢的にも当時は殆ど40歳代の働き盛りの人ばかりで、また熊本女子大学の慣行に詳しく他学部の教員とも親しく、さらに県庁や卒業生など、多方面にわたって豊かな人的ネットワークをお持ちの方ばかりであった。とりわけ米澤先生は、

当時は寄り合い所帯の本学部教員の中にあって、持てるリソースを最大限に活用して本学部の礎を築くのに努力されました。

そして2006年には、米澤先生は法人化後の初代の熊本県立大学長に就任され、本学の発展に大変寄与されました。法人化後の学長は激務のようでしたが、先生はつねに颯爽としておられ、次々といろいろな改革を断行されました。私は学部長という立場の関係上、先生の発言や行動を身近で見聞きする機会が多かったのですが、先生のアイデア、判断力、人的ネットワーク、行動力には目を見張るものがあり、これらの諸々の能力を総動員してリーダーシップをいかに発揮されました。

米澤先生が研究され、時々引用されますマックス・ヴェーバーの『職業としての政治』は、指導者論の古典の1つです。本書は「指導者とはいかにあるべきか」を論じており、指導者には「情熱、責任感、判断力」の3つの資質は不可欠であると論じています。先生はヴェーバー研究を通して、指導者としての心構えや倫理観を獲得されており、その結果、『職業としての政治』で描かれている指導者倫理で自らの行動を厳しく律していらっしゃいました。先生が管理職というポストに執着せず、恬淡とした態度をとられたことも、そのことと無縁ではありません。さらに、社会科学の研究を通して、先生は次々と生起してくる物事を歴史の文脈の中に位置づけて判断する、そういう態度を身につけられていた、と推測します。結果論ですが、ヴェーバー研究それ自体が、米澤先生にとっては、学長という大学の指導者になるための準備期間だったように思えてなりません。

この29年間の長きにわたって、生活科学部と総合管理学部、それから熊本県立大学の発展にご尽力頂き、本当にありがとうございました。先生が労力を惜しまずキャンパスに蒔かれた種を、教員一同、大切に育てていきたいと思います。